

## 1950年代の田中一光における「ジャパニーズ・モダン・グラフィック」の確立

山本佐恵(日本大学)

---

戦後日本を代表するグラフィックデザイナーの一人である田中一光(1930年-2002年)は、「日本的」と評されながら海外でも評価される作品を数多く制作した。本発表の目的は、欧米デザインの影響下にあった日本のグラフィックデザインが、戦後に独自の日本デザインを確立するうえで「日本的なもの」の表現をどのように解釈し造形に採り入れたかを、田中の作品の分析を通じて考察することである。

田中のデザイナーとしての個性はすでに1950年代後半から60年代初めにかけて完成していた。特に、漢字のタイポグラフィだけで構成した《ニューヨーク・タカシマヤ・テキスタイル展》ポスター(1959年)や《第八回産経観世能》ポスター(1961年)は、日本の伝統文化を欧米のモダンデザインの感覚で表現した作品として評価が高く、日本のグラフィックデザイン史に残る傑作の一つである。従来の桜・富士山・芸者などの日本的モチーフに頼らず、漢字と色彩のみで「日本的なもの」を表現したという点で、「ジャパニーズ・モダン・グラフィック」とも評されている。

日本のグラフィックデザインの1950年代前半の状況は、欧米のデザインの情報が大量に日本に入ってくるなかで、それらの模倣や盗用が社会的な問題にもなっていた。そうしたなか、「日本的なもの」をどのように表現するか(日本のオリジナリティの開発)という課題に、デザイン界は向き合うことになった。デザイナーたちはそれぞれのオリジナリティを追求し、50年代後半には日本のデザイナーの作品が海外で紹介されることも増え、国際的に認められるようになった。日本のグラフィックデザイナーたちが、日本デザインとしてのアイデンティティを模索していくなかで発見したものの一つが、「日本字タイポグラフィ」である。

1950年代後半、ハープ・ルバリンやルウ・ドーフスマンらニューヨークを中心とした「アメリカン・タイポグラフィ」が勃興し、これまで補佐的な存在だった文字がグラフィックデザインの中心にもなり得るという認識が日本のデザイナーたちにも共有されるようになった。田中もアメリカン・タイポグラフィに強い影響を受け、研究を始める。当時、日本でも文字への独自の探求は始まっており、漢字のみで構成された山城隆一による《森・林》ポスター(1955年)は田中ら同時代のデザイナーたちに大きな影響を与えた。日本のデザイナーたちの文字についての様々な試みのなかで、「ジャパニーズ・モダン」の一つの到達点ともいえる田中の作品が生まれた。

田中のデザインを「日本的」にしているもう一つの要素は色彩感覚である。1950年代、東京のデザイナーの特徴である論理的な造形と大阪のデザイナーの鮮やかな色彩感覚は、「東のカタチ、西のイロ」とも形容された。両者が「異種交配」し、生まれたのが「ジャパニーズ・モダン・グラフィック」なのである。